

10月25日正午必着

明石春浦先生書



進徳工夫在日新しんとくくふうはひにあたらなるにあり（陸游）

工夫は修養方法。徳に進む要訣は、日々自らを新たにすることにある。

三浦士岳先生書



鐘聲入道遠せきやうすうほうとほく 霽靄江南思あいあいりかうなんのおもひ
夕陽數峰遠せきやうすうほうとほく 霽靄江南思あいあいりかうなんのおもひ
煙外有鐘聲えんぐわいじようせいあり 山僧獨歸寺さんそうどくきせ
（高青邱）

入日の中に數峰遠く見え、江南を思ふ心は、霽靄として、はてもない位。
折から、入相の鐘は煙外に聞こえ、そして、山僧の獨り寺に歸つて行くのが見える。

10月25日正午必着

武蔵野の だんだん畑の 唐辛子 いまあかあかと 刈り干しにけり (北原 白秋)

遠聲 霜後樹 秋色 水邊村
野徑 無來客 寒風 自動門
海山 藏日影 江石 落潮痕
惆悵 高飛晚 年年 別故園

秋晚 郊居 (任 蕃)
遠聲 霜後の樹 秋色 水辺の村
野徑 來客無く 寒風 自ら門を動かす
海山 日影を蔵し 江石 落潮の痕
惆悵 高飛すること 晩く 年年 故園に別るるを

月落江路黒 前邨人語稀
幾家深樹裏 一火夜漁歸

(項 斯)
月落ちて江路黒く 前邨人語稀なり。
幾家か深樹の裏、一火夜漁して歸る。

漁村に宿泊した時の景で、漁から人が歸り
燈火が赤く見えている。

鶴聲 秋更高 (許 渾)

鶴聲 秋更に高し

鶴の鳴く聲が空高く聞える。

条幅部創作課題

四種の詩文から一種を選択して出品のこと。

數里聞寒水
初月未終夕

山家少四隣
邊烽不過秦

怪禽啼曠野
蕭條桑柘外

落日恐行人
煙火漸相親

(賈 島)

何里も先から聞こえる つめたいせせらぎ 山家には隣の家もない
あやしげな鳥が 広野に啼き 沈みゆく日に 旅人は恐れおののく
三日月は宵のうちに沈み 辺境ののろしは秦にまでとどかない
ものさびしい桑畑のかなた 炊事の火がようやく近づく



明石幸子書

千里別又

※作品には必ず落款を入れてください。

明石春浦先生書

※課題A(楷書)と課題B(四体の中より一書体選択)の二点を出品のこと。

半紙部規定課題B

10月25日正午必着

行書

此別又
千里

隸書

此別又
千里

明石春浦先生書

草書

此別又
千里

行草書

此別又
千里

山中に夜は明け初め、旅人は去って行く。空は高く、ものがなしい秋のけはい
地上の川に映じていた天の川はすでに消え去って、かぐわしい草はつめたい露の中に衰えてゆく
いまここに別れて、またも千里のかなたに赴くのだが、若さというものはいつまでも保てるものではない
君の住む剡溪への道がはっきり心に浮ぶ。いささか将来の約束をお届けしましょう。

早行寄（朱放）

戴叔倫

山曉旅人去

天高秋氣悲

明河川上沒

芳草露中衰

此別又千里

少年能幾時

心知剡溪路

聊且寄前期

早行 朱放に寄す

戴叔倫

山曉けて 旅人去り

天高くして 秋氣悲し

明河川上に没し

芳草露中に衰う

此の別れ 又た千里

少年能く幾時ぞ

心を知る 剡溪の路

聊且 前期を寄す

（出典）

朝日新聞社刊

「三體詩」下より



曾識雲仙（至小時）

三浦士岳先生臨書



月照洞庭歸客船
曾識雲仙至小時
夫容頭上綰青糸
當時驚覺高唐夢
惟有如今宋玉知

つき
月は洞庭を照らして客船帰る
かつ
曾て識る雲仙小時至る
ふう
夫容頭上青糸を緒す
おどろ
当時驚き覚む高唐の夢
しん
惟だ如今宋玉の知る有らん

清 吳熙載・篆書唐詩
ごきさい てんしよとうし

清朝の乾隆・嘉慶年間（一八世紀末あたり）から同治・光緒の初め頃までの約百年の間は、鄧石如をはじめとし包世臣、吳熙載、趙之謙などの書学の道を伝える名家が輩出した時代で、これらの名家は後の書道史に極めて大きな影響を与えたと言われている。

呉熙載は嘉慶四年（一七九九）江蘇省儀徵に生まれ、官位にこだわらず、書画篆刻の三絶に生涯をささげ、同治九年（一八七〇）に七十二歳で没したといわれる。はじめ名を廷飴、字を熙載とした。後に名を熙載、字を讓之とした。別に讓翁、晚学居士、言庵などと号した。

彼は楷・行・草を包世臣に学び、その理論と技法を信奉し、二十歳の若さですでに、師からその資質を高く評価されていたようである。

また、篆隸・篆刻は、三十歳頃に鄧石如の作品と出会い心酔していったと伝えられている。

彼の書画篆刻はいずれも格調高く高い評価を得ている。なかでも篆隸書を最も得意とした。字形は縦長で、結体は緊密、線はやや細めで張りがあり、逆筆・中鋒で運筆し、終筆は軽くおさえてそのまゝ筆を上げる。縦画の終筆は筆や筆先をとがらせ、線の中心で抜く技法を用いている。流麗な運筆で長脚を駆使した、洗練された都会的な風韻を味わい、学びたい。

（春濤）



(半折 $\frac{1}{4}$)

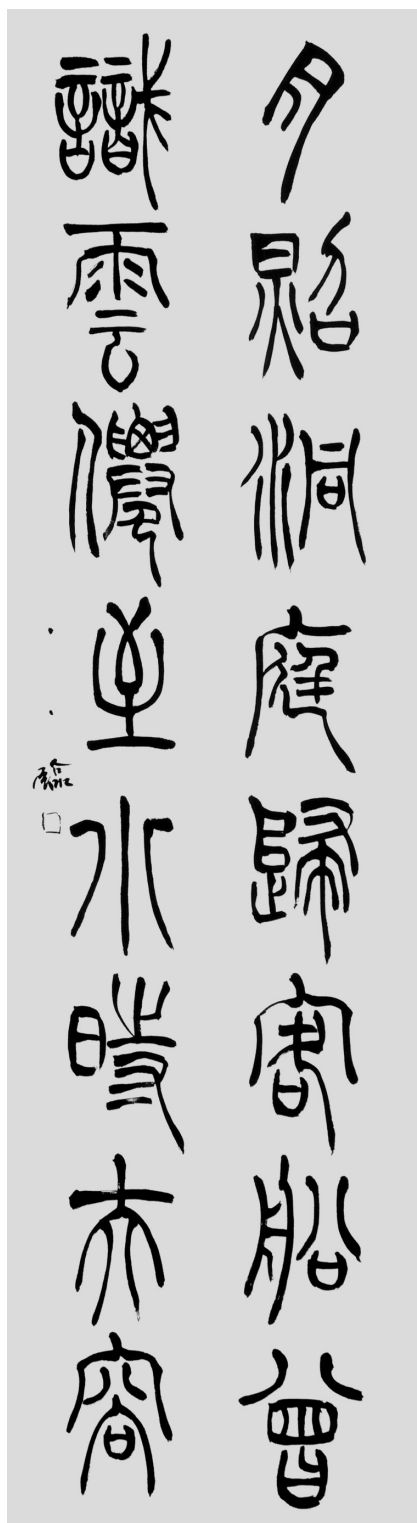
落筆如風

(東坡題跋)

筆さばきが風のように速く
軽やかである。

《倣書参考作品》

※この釈文での臨書部門の出品は出来ません。



月照洞庭歸客船 曾識雲仙至小時 夫容(頭上綰青糸)

10月25日正午必着

教育部毛筆

浮雲

うき
浮

ぐも
雲

中学一年

雨宮春聲先生書

応援

おう
応

えん
援

中学二三年

菅井松雲先生書

※作品には必ず学年と氏名を毛筆で記入してください。



榎戸春龍先生書

よう
洋

が
画

小学五年



藤井良泰先生書

き
基

ほん
本

小学六年

※作品には必ず学年と氏名を毛筆で記入してください。

10月25日正午必着

化石

藤田幸春先生書

か
化

せき
石

小学三年

足音

細谷春誠先生書

あし
足

おと
音

小学四年

※作品には必ず学年と氏名を毛筆で記入してください。



明石幸子書

そ ら 小学一年・幼年



森戸春濤書

だい 工 小学二年

※作品には必ず学年と氏名を毛筆で記入してください。

10月25日正午必着

教育部硬筆

ペン字部

大ぜいの人が出る
神社のまつりには

小学五年

家庭菜えんで大根
やにんじんを作る

小学六年

海外貿易に大きな役
わりをはたす港です

中学

紅葉の谷間から聞こえ
てくるせせらぎの音

一般(級位)

月夜の光に來ませありひ
きの山來へなりて遠からなくに

月讀の光に來ませ あしひきの 山來へなりて 遠からなくに (湯原王)

一般(段位)

明石幸子書

※出品には玄和硬筆用紙を使用し幼年・小学は鉛筆 中学・一般はペンまたはサインペンで書くこと。
また、作品には必ず学年と氏名を記入してください。消しゴムを使用した作品は出品には適しません。

美しい流せん型を	したイルカが泳ぐ
----------	----------

小学四年

外にでてしんせ	んな空気をすう
---------	---------

小学三年

こくごのテスト	で百点をとった
---------	---------

小学二年

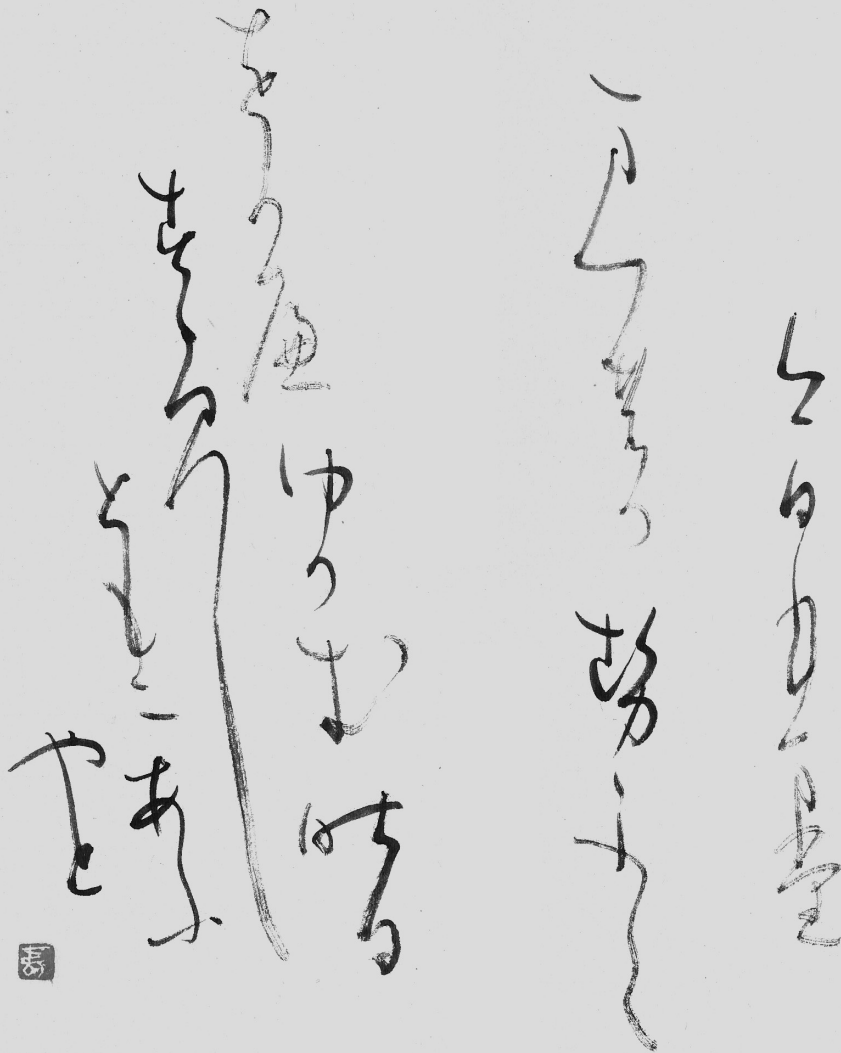
お月さまが	れいなよるで
すき	

小学一年

まるい	な
きれい	おつきさま

幼年

※出品には玄和硬筆用紙を使用し幼年・小学は鉛筆 中学・一般はペンまたはサインペンで書くこと。
また、作品には必ず学年と氏名を記入してください。消しゴムを使用した作品は出品には適しません。



岩本景楓先生書

今日もまた まつのかぜふく をかへゆかむ 昨日すゞみし ともにあふやと (西行法師)
毛万堂 万 農可勢 可遍 可 春 見 毛二